

C I S M O R

V O I C E

シスモールボイス Summer 2004

2 ごあいさつ 森 孝一
Koichi Mori
Greetings from Director

3 CISMOR国際ワークショップ2004報告
CISMOR International Workshop 2004

4-13 特集「エルサレム
(イエルシャライム / アル・クドゥス)」
Feature Articles on "Jerusalem
(Yerushalaym / al-Quds)"

8-9 「エルサレム体験」
アダ・T コヘン ドロン・B コヘン
Ada Taggar-Cohen & Doron B. Cohen
"The Jerusalem Experience"

10-11 エルサレム
Photo Gallery of Jerusalem

12 「私たちの中のイスラエル」
勝又悦子 勝又直也
Etsuko Katsumata & Naoya Katsumata
"Israel in Our Mind"

13 「旧市街からの小さな架橋」
田原 牧
Maki Tahara
"A Small Bridge in the Old City"

14-15 スタッフ紹介
CISMOR Staff

16-17 研究会報告
CISMOR Research Seminars

18-19 CISMORインフォメーション
CISMOR Information

C I S M O R

Center for Interdisciplinary Study of Monotheistic Religions

中東で生まれた3つの一神教、すなわち、ユダヤ教、キリスト教、イスラームは「兄弟・姉妹の関係」にありながら、欧米とイスラーム世界は対立・抗争の歴史を繰り返してきました。今日の世界が直面している「文明の共存」と「安全保障」の実現のためには、一神教について、文明論的な視座からの「総合的」で「学際的」な教育・研究活動が必要です。

そのため同志社大学では「一神教学際研究センター」を設立し、2003年度から正式に活動を開始しました。これは21世紀COEプログラム「一神教の学際的研究——文明の共存と安全保障の視点から」の中核拠点となるものです。具体的には、「一神教の再考と文明の対話」研究会と「アメリカのグローバル戦略と一神教世界」研究会を立ち上げ、学外からも多くの研究者に参加してもらい、それぞれのテーマに関して活発で実りある議論を行っています。また、今年2月には海外のいろいろな地域から25名の研究者と大学院生を招き、「宗教における戦争と暴力——一神教世界からの応答」というテーマで国際ワークショップを京都で開催し、大成功のうちに終えることができました。ワークショップを通じ、国内外の人々に「一神教学際研究センター」の意義と重要性を認識していただきました。他にもいろいろなテーマでの公開講演会を開催しました。今年度は、昨年度以上に充実した活動を展開していく予定です。

「一神教学際研究センター」は、一神教世界について学際的で総合的な研究・教育活動を行い、文明の共存の実現をめざすスペシャリストを養成すると共に、その研究成果を世界に向けて発信し、イスラーム世界とユダヤ・キリスト教世界の「仲介者としての役割」を果たすことをめざしています。対立と抗争の歴史的しがらみから自由な「外部」に位置する日本だからこそ実現できた研究・教育センターであり、3つの一神教を同時に本格的かつ学際的に研究できるところは、世界にも例を見ません。こうしたユニークな研究・教育活動を一人でも多くの方に知っていただき、一神教ならびに一神教文明に関心をもっていただくため、この「CISMOR VOICE」を創刊することになりました。これにより日本での一神教に対する理解がさらに深まることを期待しています。



同志社大学 一神教学際研究センター
センター長
森 孝一

一神教学際研究センターの活動

世界を結ぶ研究計画

グローバルな共同研究体制
世界へ向けて研究成果を発信
聖職者の交流を促進
研究者間の情報ハブへ



一神教学際研究センター

国際的な教育活動

チュートリアル・エデュケーション
オンサイト・エデュケーション
インディペンデント・エデュケーション

CISMOR国際ワークショップ2004報告

CISMOR International Workshop 2004

「CISMOR国際ワークショップ2004」では、中東、東南アジア、EU、アメリカ合衆国から、10名の研究者と15名の大学院生を招待した。このワークショップは、「宗教における戦争と暴力：一神教世界からの応答」、「イスラームと戦争・暴力」、「キリスト教と戦争・暴力」、「9・11以降の平和の模索」と題した、4つのセッションで構成され、「宗教」、「戦争」、「テロリズム」という問題を再考する目的で開催された。各セッションとも、熱のこもった議論がかわさ

れた。発表は、ウェブ上で公開予定である。ワークショップ概要、及び参加者は以下のようであった。

CISMOR国際ワークショップ2004

「宗教における戦争と暴力：一神教世界からの応答」

期日：2004年2月20～21日 会場：同志社大学 今出川キャンパス ウェスティン都ホテル京都

2月20日(金)

第1セッション 国際シンポジウム「宗教における戦争と暴力：一神教世界からの応答」

司会：小原克博(同志社大学)

講演：マーク・ユルゲンスマイヤー(カリフォルニア大学 サンタバーバラ校)「なぜ今、宗教的脅威なのか？」

サッラーフッディーン・クフタロウ(シャイフ・アフマド・クフタロウ財団)「イスラームにおける非戦と非暴力」

臼杵 陽(国立民族学博物館)「聖地における戦争と暴力：ある日本人の見たエルサレム」

コメント：バーバラ・ジクムント(同志社大学) 澤井義次(天理大学)

第2セッション ワークショップ「イスラームと戦争・暴力」

司会：塩尻和子(筑波大学)

発表：中田 考(同志社大学)「戦争/暴力を拒否する」とは何を意味するか? ——イスラーム的ディスコースの枠組」

ムハンマド・ディーン・シャムスディーン(インドネシア・ウラマー評議会)「一人のイスラーム教徒から見た戦争と暴力」

アシュラフ・ボルー・ジェルディー(イラン内務省)「イスラーム法の観点からみた戦争と平和」

コメント：ヤスパー・スヴァートヴィック(ルンド大学)

ハーシム・シャフリール(東南アジア太平洋地域イスラーム・ダーワ評議会) 富田健次(同志社大学) 越後屋 朗(同志社大学)

2月21日(土)

第3セッション ワークショップ「キリスト教と戦争・暴力」

司会：森 孝一(同志社大学)

発表：ジェイムズ・ターナー・ジョンソン(ラトガース大学)「研究史と今日の論争における正戦論」

アーシュラ・キング(ブリストル大学)「キリスト教、暴力そして平和の追求」

小原克博(同志社大学)「平和主義と正戦論の葛藤：日本およびキリスト教の視点」

コメント：ヌリット・ノヴィス・ドイッチュ(ヘブライ大学) イブラヒム・ザイン(マレーシア国際イスラーム大学)

田原 牧(東京新聞) 深井智朗(聖学院大学)

第4セッション ワークショップ「9・11以降の平和の模索」

司会：細谷正宏(同志社大学)

発表：ハサン・ハナフィー(カイロ大学)「イスラームはリスクか希望か？」

イラン・パッペ(ハイファ大学)「イスラエル×パレスチナ紛争において見えるもの、見えないもの」

森 孝一(同志社大学)「アメリカはアメリカ原理主義を乗り越えられるのか？」

コメント：サッラーフッディーン・クフタロウ(シャイフ・アフマド・クフタロウ財団) マーク・ユルゲンスマイヤー(カリフォルニア大学 サンタバーバラ校)

村田晃嗣(同志社大学) 内田優香(民主党政策調査会)

他海外参加者：ムハンマド・アブー・バカル(マレーシア国際イスラーム大学) アブドゥル・レザー・アリーザード(テヘラン大学) ヌール・アマリ・マフドダーウード(マレーシア国際イスラーム大学) ムハンマド・アブー・サムラ(デイヴィッド・イェリン大学) ハリード・アル・ルシュド(モスクワ大学) ウィリアム・ブッシュ(ウィーン大学) ジョナサン・イーストウォルド(プリンストン大学) サルヴァドール・マグワイア(カリフォルニア大学 サンタバーバラ校) ガレン・ムーレイ(バークレー大学院神学連合) ハワード・ローゼス(プリンストン大学) アーロン・タッパー(カリフォルニア大学 サンタバーバラ校)



エルサレム

イエルシャライム / アル・クドゥス



写真提供：在日イスラエル大使館

セム系一神教と呼ばれるユダヤ教、キリスト教、イスラームの3宗教が共通して聖地としているのがエルサレム(ヘブライ語でイエルシャライム / アラビア語でアル・クドゥス)である。このエルサレムの中に全長約4キロの、赤みを帯びた石の城壁で囲まれた旧市街地がある。この旧市街地は、南東に位置する地域(ユダヤ教徒は「神殿の丘」「モリヤの丘」、ムスリム[イスラーム教徒]はハラム・シャリーフ[高貴な聖域]と呼ぶ)を別にすると、ユダヤ人地区、キリスト教徒地区、ムスリム地区、アルメニア人地区に分かれている(次頁地図参照)。ユダヤ人地区以外の3地区ではキリスト教徒とムスリムが混住している。アルメニア人とはキリスト教を最初に国教とした民族である(4世紀初頭)。アルメニアにキリスト教が伝えられたのは1世紀のことであり、早くからエルサレムに移住する者が多かった。さらに1918年のトルコによるアルメニア人大虐殺の際に、約1万人がパレスチナに逃れ、エルサレムに住みついた。現在、エルサレムにおけるアルメニア人は約2500人である。

エルサレムという名前は「平和」という意味のヘブライ語「シャローム」やアラビア語「サラーム」と結び付けられ、よく「平和の町」と解釈されるが、本来は「シャレム(神)の礎(土台)」という意味であったと考えられている。

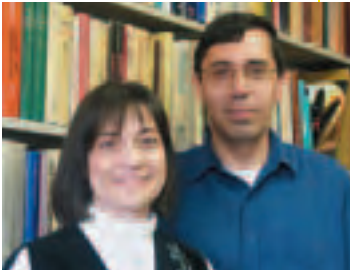
エルサレムがイスラエル民族と強い結びつきを持つことになるのは紀元前1000年頃のダビデによる占領によってである。これによりエルサレムはイスラエル統一王国の首都となった。ダビデはこのエルサレムに神ヤハウェの臨在の象徴である、十戒を刻んだ2枚の石板を収めた契約の箱を運び入れ、ヤハウェ信仰の中心地とした。ヘブライ語聖書(ユダヤ教ではタナハ、キリスト教では旧約聖書)のサムエル記下4章6節によると、それまでエルサレムはエブス人の町であったとある。エブス人やダビデ王の時代のエルサレムの中心は現在の旧市街地の南東部にあるオフェルの丘にあった。続くソロモン王の時代にエルサレムは拡張され、現在の神殿の丘 / ハラム・シャリーフに神殿や王宮が建築された。この神殿は前586年の新バビロニア帝国によるエルサレム陥落(ユダ王国滅亡)の際に破壊され、この時以来、神殿に安置されていた契約の箱の行方はわかっていない。

前539年にバビロニアは滅亡し、アケメネス朝ペルシアの支配となり、ペルシアによる寛容な宗教政策の下、前515年、エルサレムに神殿が再建された。これを第2神殿と呼ぶ。前331年にペルシアが滅亡し、アレクサンドロス大王がオリエント世界を支配することにより、ギリシア文化がもたらされた。前323年の彼の死後、エルサレムは前3世紀にプトレマイオス朝エジプト、前198年からはセレウコス朝シリアの支配下に入った。セレウコス朝のアンティオコス4世はユダヤ教弾圧(ヤハウェ礼拝禁止、第2神殿にゼウス・オリュンポスの像と異教の祭壇設置、安息日や割礼の儀式的禁止など)を行い、これに対するハスモン家一族の反乱(マカバイ戦争)が前167-164年に起こり、ユダヤ人はエルサレムを占領し、異教化されていた神殿を清め、再奉献した。これを記念するのが現在も行われているハヌカ祭である。前142年になってハスモン王朝が成立し、ユダヤ人による独立国

エルサレム体験

アダ・T .コヘン
イスラエル生まれ。ベン・グリオン大学博士課程修了、Ph. D.。専門は、聖書学、古代中近東学。現在同志社大学神学部助教授、現代ヘブライ語などを担当。

ドロン・B .コヘン
イスラエル生まれ。同志社大学修士課程修了。村上春樹著『ノルウェイの森』など、日本文学をヘブライ語に翻訳し、イスラエルに紹介している。現在同志社大学神学部嘱託講師、ユダヤ学などを担当。



Sunset over the walls of Jerusalem (Hanan Shafir)

何世紀もの間、エルサレムはイスラム・キリスト教・ユダヤ教という3つの一神教の信徒にとり、神聖な都市であった。神聖な都市であることは恵まれた幸せであるが、不幸の種にもなる。エルサレムは巡礼の地であり、世界中から人々を惹きつける。しかしこの地はまた、征服を目指す軍隊をも引き寄せてきた。3000年以上に及ぶ長い歴史の間に、この町は幾度となく破壊されては再建されてきた。都市が複数の宗教にとって聖なる場所である時、深刻な衝突や対立が生じることがある。同時にそこは、寛容さを学ぶ場ともなり得るのだが。

そのような場に生きるのは、容易なことではない。歴史の重みを背に感じながら育つのである。この地が、数々の偉大な思想や世界宗教の源なのだ、と認識せざるを得ない。現代でも、エルサレムは「預言者たち」の町であり、「預言者たち」は、どうやって世界を救うかを、それぞれ独自に思考するのである。「エルサレム・シンドローム」という言葉すらある。それは、巡礼にやって来た人がこの土地の神聖さに感動するあまり、突然自らが救世主だと信じ込み、使命を宣言しつつ往來を歩き回るとい現象である。当局は、この現象を何度も見ていて、こういう人への最善の治療は故国へ送り返すことだと知っている。エルサレムの威力から遠ざかると、すぐに元に戻るのである。町は変わらず存在し、そういう人々がまた引き寄せられて来ることを知っている。

私達は、二人ともエルサレムで生まれた。そして、エルサレムの特有な空気に慣れ親しんで成長した。この何十年かにエルサレムに起こった、歴史的な変化も体験している。私達が生まれた頃、町はまだイスラエルとヨルダンに二分されていた。中央の境界を鉄条網が走り、私達は近づかないように命じられていた。向こう側から銃弾が飛んでくることがあったのだ。1967年には、戦争（第3次中東戦争）が起こった。ある日学校に行くと、突然近辺に爆弾が落ちたので、防空壕に逃げた。だが戦争はすぐに終わり、エルサレムはまた一つになった。私達は「嘆きの壁」や「神殿の丘」など、それまで話にしか聞いたことのないところへ

行けるようになった。よるこばしい体験だったが、間もなくテロが起こるようになり、町が新たに深刻な事態に陥っていることが分かった。それ以来、町は、テロの恐怖におののき、絶え間なく押し寄せる暴力の間につかの間の平和がある、という不幸にみまわれている。これが平和の源であるはずのエルサレムの、悲しい宿命なのだ。

それでもなお、エルサレムに住んで教えられたことは、出生も信仰も、自分とは違う人々と共存して生きることの可能性だった。世界中からの人々、様々な宗教の信者たちと出会ったが、彼らはいいていエルサレムで平和に暮らし、エルサレム独特の体験を楽しむことを望んでいた。エルサレムでは、さまざまな宗教の祝祭を見ることができる。ある人が全部の宗派・教会等の祝祭日を数えてみたら、一年の日数より、祝祭日の述べ日数の方が多かったということだ。宗教的にこれほど多彩な経験ができるのは、世界でも、エルサレムをおいて他にないだろう。

さらにエルサレムに特有な体験は、異なる安息日である。金曜日には、近郊の村町からムスリムたちがアルアクサー・モスクに礼拝に詰めかけ、エルサレムの旧市街の狭い通りを埋め尽くす。金曜の夜、ユダヤの安息日が始まると、ほとんどの交通機関は休止し、町は静寂に包まれる。翌土曜日には、大勢のユダヤ人がシナゴーグや「嘆きの壁」に出かける。日曜日は、エルサレムのほとんどの人にとって、新しい週の始まりである。この日も、車の騒音に重なって、あちこちから信者に礼拝を呼びかけるキリスト教会の鐘が聞こえている。

私達の経験から言えば、これらの異種の宗教は互いに寛容さを持ち、平和的に共存することができる。では何故、暴力や憎しみ、排斥が起こってしまうのか。簡単な答は見出せない。だが解決は政治家の決定によるものではなく、この歴史的都市で普通の暮らしをしたいと願う、個々の人間の善意にかかっていると思う。現在は大きな緊張対立の時である。善意の一般人の静かな声が、暴力的轟音にかき消されている。しかしいつの日か、人々が声を一つにし、皆の利益のために厳し

く残酷な現実を変えることができる日がくるかもしれない。

今、私達は、エルサレムから遠く離れた京都にいる。この2つの都市は、共通点を多く持っている。それぞれが、それぞれの国の伝統・文化の中心である。重要な宗教のセンターであり、いくつもの宗教的伝統が同時に存在し、学問や教育の中枢でもある。エルサレムは、古くから「平和の都市」という名を持ち、京都はかつて「平安京」と呼ばれていた。平安が京都から広がってゆかないものだろうか。そして、エルサレムにも届かないだろうか。私たちのCISMORの活動が、これに貢献できることを切に望んでいる。

京都・同志社へは、これで二度目の訪問である。前回の1993年、私達は、高名なイスラエル詩人のイエフダ・アミハイ氏を迎え、神学館で講演をお願いすることができた。その際、日本人の友人と共訳しておいた氏の作品を何作が贈呈した。アミハイは、生涯のほとんどをエルサレムで過ごし、エルサレムを題材に、美しい詩を多く残している。

この手記を終えるにあたり、そのうちの二篇を紹介しておく。最初の詩は、エルサレムの町が人々の心によびかける、歴史的感情をうたう。この町は、全ての者たちが、親近感を感じる町なのだ。しかしどのように？おそらく、皆それぞれの慣習を通して、それを感じることができるのであろう。アミハイは、ムスリムも、ユダヤ教徒も、キリスト教徒も、それを通してエルサレムと自分とを関連づける宗教的感情のことを詠う。また同時に、人々がこの町でしばしば感じる、儂さを喚起している。

第二の詩は、寛容の必要性に関するものである。常に自分を正しいと信じるのは、非常に危険なことである。なぜなら、そうすることによって、他者はいつも正しくないと信じこんでしまうからである。疑心することも持ち合わせていた方がよい。疑いと愛は、私たちの世界を、もっと寛容に生きることが可能な場所にするだろう。

これらが、アミハイが詩を通して教えるようにしていることであり、私達が学んで欲しいと望んでいることでもある。

エルサレム それは

エルサレム それは
人が忘れてきた事を
思い出すところ
だが何を忘れたのか思いもよらない。

思い出そうと私は
父の顔を私に重ねてみる。

これが私の町
そこで私の夢の器はつまっている
潜水夫達のもつ酸素ボンベのようなもの。
聖なるものは時として そこでは
愛に変容する。

そしてこの山で聞かれる問は
いつものように問かけられる：
「私の羊をみななかったかい？」
「私の羊がいをみななかったかい？」

私の家の戸口は開いている
死者が蘇った墓のように。

私たちが正しいと思っていた場所

私達が正しいと思っていた場所から
春に咲く花は
二度と芽を出すことはない。

私達が正しいと思っていた場所
そこは校庭のように踏みつけられて固いだけ。

しかしモグラが掘り、人が耕すように
疑いと愛が世界を柔らかくしていく。
その時ささやき声が聞こえてくる
朽ち果てた家のあった場所から。

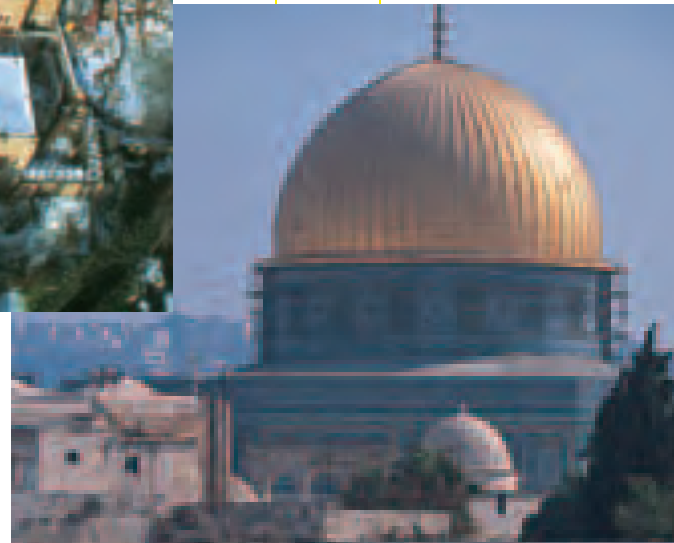
（イエフダ・アミハイ作
平賀久裕 / ドロン・B .コヘン共訳）



写真：在日イスラエル大使館



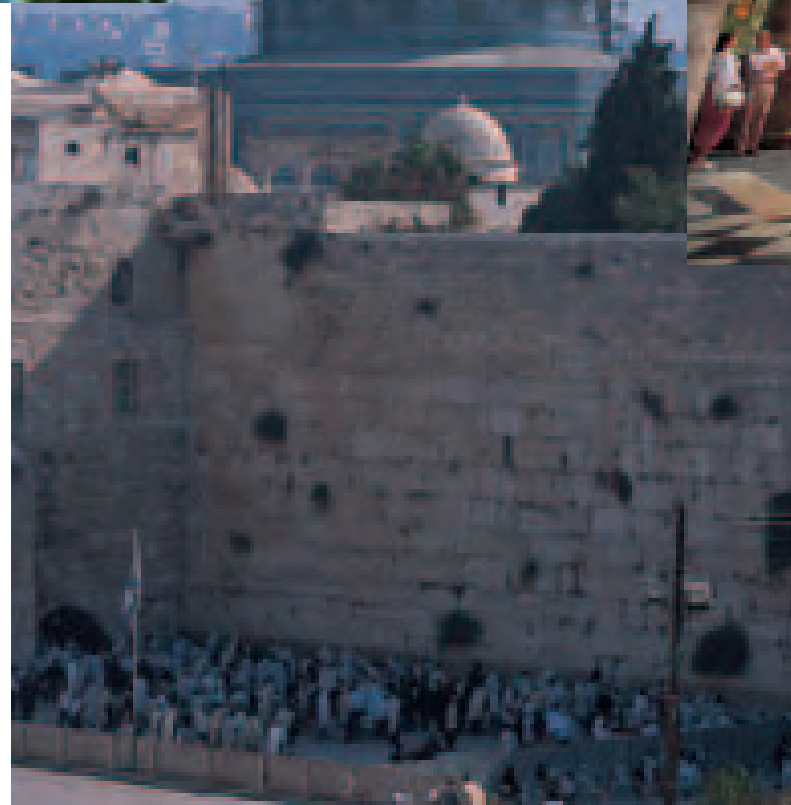
写真：Hanan Shafir



写真：中野晴生



写真：Hanan Shafir



写真：中野晴生

私たちの中の イスラエル

勝又悦子
東京大学大学院人文社会学研究科博士課程単位取得退学。エルサレム・ヘブライ大学大学院ヘブライ文学研究科博士課程在籍中。現在、同志社大学神学部嘱託講師。担当科目は、「ユダヤ人の生活とユダヤ教の歴史」と「ユダヤ教の根本理念」。CISMOR共同研究員。

勝又直也
エルサレム・ヘブライ大学大学院ヘブライ文学研究科博士課程修了、Ph. D.。専門は、中世ヘブライ文学(宗教詩、世俗詩、散文)、地中海・中東比較文学。現在、京都大学大学院人間・環境学研究科助教授、CISMOR共同研究員。



エルサレム市郊外、アリン整形外科専門病院
附設療育施設での集合写真 (筆者撮影)

10 年近く住んだエルサレムから帰国して半年。久々の日本での生活の些細な局面で、いつのまにか自分に染み付いた「イスラエル」を発見する。

例えば週末。ユダヤ教では、週末となる金曜の日没から土曜の日没の安息日は労働禁止。火、電気を使わず、日常とは異質の静謐な時間が流れる。エルサレムでは、バスなどの公共交通機関はストップし、商店も全面的に閉まる。そこで、金曜は朝から、食料品や生活必需品の買い出しに奔走するのが常だった。トイレットペーパーは？ 子供の紙おむつは？ ミルクは？ お金もおろしとかないと・・・。特に、祝日と重なって連休になる時には、焦りは倍増。それで、いまだに週末が近づくと身構えてしまうし、日曜日にバスが走っているのを見ると、一瞬びっくりする。

例えばスーパーにて。レビ記 11 章などの食物規定に則り、反芻しない豚、鱗、ひれのないエビ、カニ、ウナギ類を店頭で見ることはない。更に、「その母の乳で山羊を煮てはならない」に基づく肉と乳製品の分離を順守する人々は、商品は、片っ端から売り場備え付けのナイロン袋に入れて、かごの中の段階から、両者が接触しないようにする(そんな人の家では、調理器具、食器、流しに至るまで、肉、乳用に分かれているものだ)。食物規定を守る、守らないは個人の自由だが、レジでは、私も何となく、肉と牛乳は重ならないように置いていた。それで、今でもハムとチーズがどんと重なっていたりすると一瞬たじろぐ。

例えば、ベビーカーを抱え、階段を上り下りするとき。イスラエルでは、必ず誰かが飛んで来て助けてくれた。通り過ぎる人、バスで同席する人が、まるで永年の旧知のように、助け合い、口角泡を飛ばして議論し、時に喧嘩になるダイレクトな人間関係。買い物をし過ぎたお婆ちゃんは、バスの乗り口で、あなた、これ持って、あなたはこれ、と自分の荷物を他の乗客に割り当てている。そんな感じで、赤ちゃんを渡された友人もいる。障がいのある人々の姿も、イスラエル

では目立つ。私たちの学んだヘブライ大学でも、たくさんいた。これは、障がいがあっても、普通に街に出ているということ。そして、実にうまく助け合っている。例えば、白い杖を手にした人、盲導犬を連れて人がバス停に来ると、たちまち「何番のバスに乗るんだ」と人が寄ってくる。そのバスが来ると、さあ来たと、バスの乗り口に手を引いていく。バスの運転手は運転手で、昇降口が開くと、ぶっさらぼうながら、「＊＊番だよ」と叫ぶのを忘れない。

こんなことに目が行くのは、実は、イスラエル生れの長男が、重度の障がい児だからかもしれない。そして、長男の医療や療育現場を通して、アラブ・ユダヤのある種の共生を目にしてきた。産科、小児科は、子沢山の家庭が利用する率が高い。結果、エルサレムの病院では、ムスリムのお母さんと、ユダヤ教の中でも超正統派の敬虔なお母さんが、同じフロアをうろろろすることになる。共に、スカーフ・ガウンで身を包んでいる。医師も、ユダヤ人、アラブ人あり。ちなみにヘブライ大学病院の ICU で、最初に長男の治療に当たったのはムハンマドというムスリムの医師。適切な判断と治療で、命を救ってくれた。交代したのは、ロシアなまりの強い若いユダヤ人の医師。生命の尊厳の前に、宗教も出自も超えた最大限の治療を受けた。その後も、充実した療育を受けてきたが(日本のこの分野の遅れは著しい)、そこでは、アラブ系、ユダヤ教各宗派の子供、世俗ユダヤ人、そしてなぜか、日本人のうちの子が、一緒にいた。親の会では、アラブ、ユダヤ、関係なく、一同に集い、冗談を言い合っていたものだった。そんな光景を、私は不思議な思いで見ている。もしかすると、障がい者という、健常者からすれば、やはりまだまだマージナルな世界だからこそ、可能な光景かもしれない。だとすれば、日本という三大一神教の本場からすればマージナルな世界も、三者のより良い共存を促す発信基地になれるかもしれない。

旧市街からの 小さな架橋

田原 牧
同志社大学研究開発推進機構・客員フェロー、東京新聞特報部記者。豊富な中東滞在経験を生かし、独自の視点から社会情勢をリポートしている。



エルサレムの旧市街は迷路だ。頭の中にはムスリム、ユダヤ人、正教徒、アルメニア人など、各居住区の地図が描かれている。しかし、何回訪ねても、勾配のある曲がりくねった路地を上り下りするうち、とんでもない所にたどり着いてしまうのだ。

1998 年 10 月。旧市街北のムスリム地区に友人を訪ねるうちに黒人ばかりいる洞窟のような一角に迷い込んだ。鉄門の獄舎(ハブス・バーブ・ル＝ハディード) 地区。築後 900 年を超す建物が並ぶ。「奴隷刑務所(ハブス・ル＝アビード) なんて汚い呼ばれ方もある」。道を尋ねた住民の一人、アリ・ジッダさん(当時 48 歳) が教えてくれた。彼によると、この地区には約 70 世帯のアフリカ系パレスチナ人が暮らしていた。

彼らの祖先はスーダン、チャド、ナイジェリア、セネガルなどアフリカから巡礼目的や第 1 次中東戦争への義勇兵として渡ってきたムスリムたちだ。ジッダさんの一族も 36 年、チャドからメッカを経て、ここに来た。

パレスチナ人には、他のアラブ人と比べて「進歩的」というイメージがある。社会主義色の濃い闘争が隆盛だった 60、70 年代の残像だ。だが、ここで出会った女子学生タマームさんの言葉はそんな先入観を覆した。

「白い同胞との結婚を向こうの家族に反対された。よくある話よ。同じ学校に通い、ともにイスラエル兵に石を投げた仲なのに。特に旧市街は慣習が古い。あの地区に近づいちゃダメ、なんて年寄りには少なくないわ」

「黒い猫」と呼ばれて、登校拒否になった少女の話も聞いた。人種差別があった。「たまに私たちはアフリカ人よ、と絶叫したくなる」。タマームさんは言い放った。

同じ頃、エルサレム南部ギバト・ハマトスの帰還センターを訪ねた。プレハブの簡易住宅の間を原色の布をまとった女性たちが行き交っていた。イスラエルへのエチオピア移民たちだ。84 年のモーゼ、91 年のソロモンの二大空輸作戦後も、

エチオピア移民の数は増え続け、当時、10 万人に迫っていた。

イスラエル軍内部ではそのころ、深刻な論議が起きていた。エチオピア移民の兵士が相次いで自殺したからだ。原因はいじめ。「クシ」という黒人の蔑称が横行していた。

「1 週間かけエチオピアの田舎から 790 キロを歩き、隣国スーダンとの国境では捕まって刑務所にも入れられた。そして、ようやくたどり着いた『乳と蜜の流れる地』でシナゴーグを訪れると、お前は異端だ、という扱いが待っていた。人々と一緒にトーラー(聖典) を読むことを拒まれた」。

移民省に勤めるエチオピア移民の一人、シュロモ・モラさん(当時 33 歳) は 84 年に受けた「屈辱」を忘れていなかった。肌の色や言葉の壁とともに、宗派の違いが差別を助長する一因になっていた。

パレスチナ人のジッダさんは「米国から移住してきた『ブラック・ヘブルー』たちと交流を進めている」と話した。ブラック・ヘブルーは原始キリスト教徒に近い黒人集団で、ヘブライ人の子孫を自任している。この言葉を聞き、イスラエル国会で唯一のエチオピア系議員アデス・マサラ氏(労働党) に電話をした。ジッダさんたちを紹介したかった。マサラ氏は「同じ音楽や料理を楽しめる関係は大切だ」と提案に応じてくれた。が、その後の展開は残念ながら分からない。

旧市街にはイスラーム、ユダヤ教、キリスト教だけでは分けがたい迷路があった。2004 年春。パレスチナ情勢は泥沼化の一路をたどり、「宗教戦争」の色彩すら濃くしている。そのいま、あの迷路を思い出す。迷路は隘路とは限らない。その複雑さゆえの出会いもあった。そんなあざなわりが和平の架け橋になりはしないか。暗いニュースの傍ら、極東の地でふと、そんな思いに駆られる。

スタッフ紹介

CISMOR Staff



石川 立 (Ritsu Ishikawa)

同志社大学神学部神学科助教授。

専門：新約聖書学

「CISMORの環境の中で、3宗教のそれぞれの経典を成り立たせる核のようなものが探れたらと思っていますが...。」

臼杵 陽 (Akira Usuki)

同志社大学研究開発推進機構・客員フェロー、国立民族学博物館地域研究企画交流センター教授。

専門：中東地域研究

「イスラームとユダヤ教という一神教の大伝統のはざまに生きる人びとのありように関心を寄せてきましたが、今後はアメリカという補助線を引いて考えていきたいと思います。」

越後屋 朗 (Akira Echigoya)

同志社大学神学研究科教授。

専門：ヘブライ語聖書学

「ヘブライ語聖書学（旧約聖書学）ということで加えてもらいました。ここでのテーマは一神教の成立過程の解明です。」

小原克博 (Katsuhiro Kohara)

CISMOR 幹事、同志社大学神学研究科教授。

専門：キリスト教思想

「キリスト教思想や、比較宗教倫理学を専門としていますが、同時に、この困難な時代に新しいタイプの宗教間対話に参加するという、すばらしい機会であると考えています。」

アダ・Ｔ．コヘン (Ada Taggar-Cohen)

同志社大学神学部神学科助教授。

専門：聖書学、古代中近東学

「CISMORに参加することは、イスラエル人であり、ユダヤ人である私にとって、重い責任を負うことですが、同時に、この困難な時代に新しいタイプの宗教間対話に参加するという、すばらしい機会であると考えています。」

バーバラ・Ｂ ジクムンド (Barbara Brown Zikmund)

同志社大学アメリカ研究科教授。

専門：アメリカ宗教史

「CISMORのプログラムを通して、研究者を含む日本の皆様が、世界における宗教的多様性を理解し、宗教間の相互理解へ関心を持って下さることを希望しています。」

四戸潤弥 (Junya Shinohe)

同志社大学神学研究科教授。

専門：イスラーム法

「イスラーム文明が内包する法と秩序の解明は宗教的研究を通じて、より理解可能となることを明らかにしていきたい。」

田原 牧 (Maki Tahara)

同志社大学研究開発推進機構・客員フェロー、東京新聞特報部記者。

専門：イスラーム地域研究

「頭脳の不足分を度胸と体力（？）のみで補ってきました。中東裏通りの道案内で、お役に立てれば幸いです。」

富田健次 (Kenji Tomita)

同志社大学神学研究科教授。

専門：現代イラン研究

「近代西欧の価値観を排してイスラームの社会の構築を説いたホメイニー師、また文明間の対話を提唱したハータミー大統領と言えばイランですが、この国の研究を介して、CISMORに貢献したいと思っています。」

中田 考 (Ko Nakata)

CISMOR 幹事、同志社大学神学研究科教授。

専門：イスラーム学

「セム系一神教の比較研究は、学生時代からの夢でした。CISMORを、多くの人々が夢を持ち寄る場にしていければと思っています。」

中山善樹 (Yoshiki Nakayama)

同志社大学文学研究科教授。

専門：中世キリスト教神学

「私はエックハルトの神論を研究している。神の一性は多性の始原であり、キリスト教が一神教であると言われるとき、単純に、多神教を排除するものであるなどと言えるのだろうか。」

廣岡正久 (Masahisa Hirooka)

同志社大学研究開発推進機構・客員フェロー、京都産業大学大学院法学研究科教授。

専門：ロシアの政治と宗教

「CISMORの共同研究に加えて頂いて、改めて一神教とは何かを考える貴重な機会をもつことができました。」

細谷正宏 (Masahiro Hosoya)

同志社大学アメリカ研究科教授。

専門：安全保障論

「2001年9・11以後の日米両国の国内動向、両国の相互関係、さらに東アジアにおけるインパクトが研究の中心です。」

松永泰行 (Yasuyuki Matsunaga)

同志社大学研究開発推進機構・客員フェロー、2003年3月まで日本大学国際関係学部助教授、現在ニューヨーク大学において調査・研究中。

専門：現代イスラーム政治論

「9・11後のアメリカとイスラーム世界の相互関係において、両者の橋渡しとなりうる研究成果を追求したい。」

三浦伸夫 (Nobuo Miura)

同志社大学研究開発推進機構・客員フェロー、神戸大学大学院総合人間科学研究科教授。

専門：科学史

「3つの一神教のもとで科学がいかに展開してきたかを歴史的に比較検討し、科学と宗教の関係を明らかにする。」

村田晃嗣 (Koji Murata)

CISMOR 幹事、同志社大学法学研究科助教授。

専門：国際関係論

「国際政治における宗教の重要性は、ますます高まっている。このセンターは、私にとっても重要な新鮮な学びの場である。」

森 孝一 (Koichi Mori)

CISMOR センター長、同志社大学神学研究科教授。

専門：アメリカ宗教史

「世界から注目される一神教学際研究センターの実現をめざしています。」

山本雅昭 (Masaaki Yamamoto)

同志社大学言語文化教育研究センター教授。現在ケルンにて在外研究中。

専門：ユダヤ文学

「ユダヤ教・ユダヤ的思想が、現代の政治世界に持つ意味を明らかにすることが、CISMORへの私の期待であり、私自身への課題でもあります。」

研究会報告																			
CISMOR Research Seminars																			
部門研究1																			
「一神教の再考と文明の対話」研究会																			
CISMORには、現在2つの研究会が設置されている。1つは「一神教の再考と文明の対話」、もう1つは「アメリカのグローバル戦略と一神教世界」というテーマのもとに、研究会を重ね議論を進めている。メンバーは、CISMOR事業推進担当者、及び共同研究員であり、神学、宗教学、政治学、法学、国際関係論、イスラーム学など、多岐に渡る分野の研究者である。 「一神教の再考と文明の対話」研究会は、「一神教」、「多神教」の概念を再検討し、「一神教」、「多神教」の歴史的展開と論理構造、そして、それらの文明の抱える問題を明らかにすると同時に、異なる文明間の共存の仕組みを探る。また、ユダヤ教、キリスト教、イスラームの内在的研究に加え、仏教、儒教、神道などの「多神教」との比較研究によって、「一神教」概念を見直し、「一神教×多神教」の枠組みを超えた新たな地平を切り開き、異なる文明の共存のための学際的・文明論的な理論モデルの構築を目指している。 昨年度は、3つのセム系一神教の展開を歴史的に概観する、3回の研究会を行った。																			
第1回研究会では、古代イスラエルにおいて一神教がどのようにして誕生したのか、という問題から出発し、第2回では、ユダヤ教・キリスト教の変容を捉え直した。それを受けて第3回では、その後のイスラームにおける神概念について発題があり、各会とも活発な議論がかわされた。発表の概要は以下の通りである。										を媒介とせずに人を救済する。しかし、イエスの死後キリスト教共同体が形成されると、その共同体への所属が救いの保証と考えられるようになるという。そのような共同体においては、神的に保証された指導者が特定の教会的生活様式を提案し、一般信徒はそれに従うことで救いの保証を得るわけである。このような教会の状況は、「人による人の支配」として、ユダヤ教の「律法による人の支配」とは別に特徴づけられる。そして氏は、この支配する人と支配される人という二重構造が、後の西洋社会のあり方を近代に至るまで規定していると分析する。									
第1回研究会において、月本氏は、近年発掘された「ヤハウェとそのアシェラ」という記述を含む資料（紀元前8～9世紀のもの）を紹介した。それは、古代イスラエルのヤハウェ宗教もまた、その当時は多神教的であったことを証明するものと考えられている。氏はまた、何故そのような多神教的状況から一神教が成立したのかという問題に関し、少数のきわめて自覚的な人々による運動（ヤハウェ専一運動）の形跡が、預言書にみられるとした。ただ、この時点で純粋な唯一神教が誕生したといわけではなく、あくまで多くの神を認めながら、その中から一つの神を崇拝するという拝一神教的形態が成立したのであるという。 ヤハウェ宗教におけるこの拝一神教的形態がどのようにして、純粋な唯一神教的形態に移行したのかは未だに明らかにになっていない。しかし、月本氏は、このような唯一神教が、当時の強大国であったエジプトや、アッシリアではなく、文化的政治的に辺境であった弱小の民イスラエルの中に生まれたという点に、歴史の逆説性を見るのである。										第3回研究会において、鎌田氏は、「一神教」という、特定の観点（キリスト教）からの宗教学的概念もまた問題を孕むという重要な点を踏まえた上で、イスラームの神理解を分析した。イスラームの神理解には、立法者、信仰内容の提示者、人間に内在する神という3つの側面がある。立法者としての神は人間に行動の規範を定める。信仰内容の提示者としての神は、世界の外にある超越神であり、人間を超えており人間とは何ら接点をもたない。人間に内在する神は、神秘主義の体験知の対象であり、世界と一体となった神である。 この第3のイスラーム神秘主義に、鎌田氏は更に2つの類型を見ている。即ち、排他的と包摂的であり、前者は「私は真理（神）である」と述べたハッラーージュに、後者は世界の全てを神の顕現と考えるイブン・アラビーの存在一性論に代表される。後者の包摂的神秘主義は、超越的な神は人間の立場に応じて様々な形態をとって顕現するという。例えば、イスラーム信仰者にとってはイスラームの神として、キリスト者にとっては三位一体の神として、多神教徒にとっては様々な偶像として、その超越神は顕現するのである。この万有在神論ともいえる立場に、鎌田氏は一神教間の、また一神教と多神教間の共生の可能性を見るのである。									
第2回研究会では、加藤氏はユダヤ教とキリスト教の社会構造論的分析を試みた。 氏は、ヤハウェ宗教の拝一神教的形態から唯一神教的形態への移行を、「人が任意に神を選ぶことができなくなった」と分析し、多神教的形態、また拝一神教的形態は御利益宗教の形態に還元できるとする。人々は御利益を求めて様々な神を崇拝したり、或いは一つの神に崇拝を集中させたりしていたが、北王国の滅亡を契機に、南王国では、御利益を与えなかった神やハウェを擁護するために、契約と罪の概念が主題化されることになる。神が御利益を与えないのは、神との契約を尊重しない（律法を遵守しない）人間の側の罪に原因があると考えられたからである。氏は、このような神理解が、申命記改革やバビロン捕囚期を経て整備され、律法を中心とする唯一神教、ユダヤ教に結実した。 氏はまた、このユダヤ教から黙示思想を介して、イエスの唯一神教的観点が形成されるとする。それは、契約と律法に中心をおくユダヤ教に対して、契約を越える神の絶対的支配と人に対する愛を説くものであった。イエスによれば神は律法や契約																			
16										CISMOR VOICE Summer 2004									

部門研究2																			
「アメリカのグローバル戦略と一神教世界」研究会																			
アメリカは今や軍事・経済・情報の各面で世界に圧倒的な優位を保持しているが、9・11テロに見られるように、国外からのアメリカへの反発も大きい。 アメリカ国内ではキリスト教右派が大きな政治勢力になって久しく、中東地域諸国の反米感情の背後には、イスラームの理念と価値観が存在している。この研究会では、アメリカの軍事・外交戦略と一神教の関係というユニークな視点から、今後の国際政治と文明・宗教という問題について多角的な分析を試みる。 昨年度はとくに「アメリカのグローバル戦略」とは何かを分析し、それぞれの一神教の視点から、批判的に議論を深めていくことを目指した。																			
12月20日 開催地:同志社大学 東京オフィス 村田晃嗣(同志社大学)「アメリカ外交の歴史的潮流」 山口昇(陸上自衛隊研究本部)「ブッシュ政権の軍事戦略」 コメンテーター:田原牧(東京新聞)、中田考(同志社大学)										この研究会では、米国の政策分析が中心課題となったが、その中でも特に軍事的動向を含む対中東政策に関し、政治学、国際学、神学、イスラーム学の研究者が、相互に意見を交換し合うという、貴重かつ意義深い議論の場となった。各会の概括は以下の通りである。 第1回研究会において、村田氏は、ウォルター・ミードの分析に依拠しながら、歴史的に見て米国外交には4つの潮流、国内重視派のジェファソニアン、海外市場重視派のハミルトニアン、国益のためなら軍事力行使も辞さないジャクソニアン、米国の道義的優越性を唱えるウィルソニアンが存在し、それらが交錯しあってきたことを強調するとともに、単純なネオコン外交論を批判した。また、主権国家の枠組みから統合へ向かうヨーロッパとの外交関係の不手際と比較して、主権国家の枠組みが強い東アジアでは、ブッシュ外交は適格的であり、中国や北朝鮮が存在するゆえ、日米同盟は不可欠であり、この関係を強固なものにするために知的インフラの整備が望まれると結論づけた。 山口氏は、共和党の議論に着目しながら論じた。同氏はまず、現政権の安全保障政策にたずさわる人々の多くは、ブッシュあるいはフォード政権のもとで活躍しており、クリントン政権下の共和党の議論に役割を果たし、それはサイバーテロなどの非対称脅威への対処（本土防衛）の重要性を主張した国防委員会報告や、ミサイル防衛を促すラムズフェルド委員会報告となって結実したことを述べた。そして、ブッシュ政権成立後は、これらの多くが実際の政策となったが、前方展開戦略の見直しについては、「不安定の弧」に対応するグローバル戦略と海外基地との関連で検討している段階であること、また、イラク戦争では、軍のディシジョン・サイクルの素早さや目標設定から破壊までの時間短縮といった米軍の迅速化がみられたと分析した。しかし、北朝鮮問題など、ブッシュ政権にも多くの課題がある。こうした課題や上述した米軍の戦略について日米間の対話が必要であると結んだ。									
1月10日 開催地:同志社大学 今出川キャンパス 宮坂直史(防衛大学)「国際テロとその対応」 石川卓(東洋英和女学院大学)「大量破壊兵器の拡散問題について」 コメンテーター:中西寛(京都大学)、松永泰行(日本大学)										第2回研究会では、まず宮坂氏が最近のテロの動向に触れ、アルカイダやジャマア・イスラミーヤの変化を分析し、テロ組織が実態を掴みにくく、さらに、広報宣伝活動が極めて巧みになって来おり、これが彼らを支援していると指摘した。次に国際的なテロ対策の流れと、1990年代以降、国連を中心に主要国サミットでのテロ対策の論議の蓄積を述べた。また、アメリカについて、イラク戦争の主眼は元来大量破壊兵器の不拡散だったが、結果から見ると微妙だと論じた。									
										石川氏は1990年代から不拡散政策が大きく変容し、特にアメリカでは、ブッシュSr.政権期から拡散対抗イニシアチブが積極的に強化されるようになったと述べた。クリントン政権では、多国間枠組みの中で、拡散の違法性を明確化する枠組みが作られ、ブッシュ政権では単独行動主義ということが喧伝されているが、ブッシュ政権とクリントン政権は連続的に捕らえるべきであり、先制攻撃ドクトリンもクリントンからの系譜に位置づけられると指摘した。 コメンテーターの中西氏は、アメリカの世界像が見えないこと、テロ対策の国防視点の重要性、また不拡散の枠組みと共に、大量破壊兵器を持ちたがる国の動機分析の必要性を述べた。一方、松永氏は「テロ」という言葉の問題性と個別具体的な分析の重要性を、また、イラン政府の立場を提示して、その合理性を述べた。ディスカッションでは日本はどのような在り方をすべきなのかを、構想し提言すべきだと総括された。									
										第3回研究会では、内田氏が、最近の中東政策について発表した。湾岸戦争直後クリントン政権は二重封じ込め政策を掲げていたが、その後展開をみせ、Desert Foxの空爆、そして昨年のイラク戦争へと展開していく流れとなった。封じ込め政策を継続できなかったことが問題だと指摘した。 伊奈氏は米国が外交政策を探るに際して、継続性や一貫性をどのように政策へと反映させていくのかということ、米国の「四極構造（政府、議会、メディア、大学シンクタンク[ビジネス]）」を示しながら述べた。また、米国の外交政策には、かなり現実主義的なご都合主義があることも述べた。 コメンテーターの臼杵氏は、米国の中東政策を疑問視していると述べ、また、米国での内政と外交のつながりの有無を問うた。また、森氏は中東政策について政策決定過程は、合理性と非合理性の二面があり、非合理的な面では、論理より感情が先立つ可能性を指摘し、さらに、イスラームは非合理性の高い社会であることへの不理解が米国に誤算的な失敗を引き起こしているのではと述べた。ディスカッションでは、米国といえども世論の動きが大きく外交政策を動かすということにおいて違いがないことが議論された。さらに、米国寄りの視点から、一括りに「中東」と言うが、やはりそこには個別的な特徴ある問題が存在しており、詳細な地域研究の必要性が指摘された。									
16										CISMOR VOICE Summer 2004									

食べてよいものと食べてはならないもの

ユダヤ教の特徴のひとつに食物規定（カシュルート）がある。食べてよいものと食べてはならないものが決められている。食べてよいとされているものはコシエル、食べてはならないものはテレファと呼ばれる。

コシエルのリストはユダヤ教の聖典であるタナハ（キリスト教では旧約聖書）のレビ記11章と申命記14章3-21節にある。例えば、四足動物の場合、蹄（ひずめ）が二つに分かれ、かつ反芻（はんすう）するものはコシエルである。そのため、豚は反芻しないので食べることはできない。食べてよいとされるものでも、定められた屠殺法（シュヒター）すなわち鋭利なナイフで動物の喉を一気に切り裂き、すみやかに血を抜かなければコシエルではない。屠殺をするのはラビの認可を受けた人物（ショヘット）である。また、タナハにある「子山羊をその母の乳で煮てはならない」（出エジプト記23章19節、34章26節、申命記14章21節）という記述から、肉と乳製品を一緒に調理あるいは食べることが禁じられている。これを遵守する家庭には肉用、乳製品用と二種類の調理器具や食器がある。

こうした食物規定に対する考え方はユダヤ教の各派（改革派、正統派、保守派、再建派）によって異なっている。現在、すべてのユダヤ人が食物規定を厳格に守っているわけではなく、いろいろなスタイルがある。（右の点線内のように、食品のパッケージにはコシエルであることが記載されている。）



イスラームにも同様の食物規定がある。クルアーン（コーラン）には「あなたがたに禁止された（食べ物）は死肉、血、豚肉、神以外の名が唱えられて（屠殺されたもの）である。絞め殺されたもの、扼殺されたもの、墜死したものの、角で殺されたもの、他の獣が食べ残したものだ」（2:173）とある。イスラームでも豚肉は食べてはならないものとなっている。ちなみに、イスラームでは酒を飲むことも禁止されている。

ユダヤ教と同じく、イスラームでも屠殺法が重要である。一般的には、イスラーム教徒が「ビスミッラー」（神の御名にかけて）と復誦しながら、動物の頸動脈から体内の血を流し出すようにして屠殺する。したがって、イスラーム圏外で生活するムスリムにとって、食べてよいとされる肉を入手することがむずかしい場合、それはたいへん深刻な問題となる。